

t v k 開局 50 周年を迎えるにあたって

(株)テレビ神奈川
代表取締役社長 熊谷 典和

2022年4月1日に私たちのt v kは開局50周年を迎えることができました。まずは社内で働いていただいている皆さん、そしてt v kコミュニケーションズ、ケイズアドバンスデータをはじめとした関連会社の皆さんやt v kを日頃サポートいただいているすべての皆さんに感謝申し上げます。また、これまで50年の歴史を築き上げていただいた諸先輩の皆様、そして社外関係各所の皆様に深く御礼を申し上げます。

私は1994年にt v k、当時のTVKテレビに入社しました。中学校・高校・大学時代と大好きな音楽を聴きながら過ごしてきたわけですが、洋楽好きになるきっかけと情報源の一つが、中村真理さんの『billboard Top 40』でした。当時話題の洋楽プロモーションビデオをフルバージョンで見られることはもちろん、真理さんのゴシップネタを含めた情報は常に放送翌日のクラスでの話題になっていました。

高校野球シーズンには野球部員は試合がt v kで放送されるかもということを話題にしていましたし、一方で活躍をしているのに放送されることがほぼない部活部員はそんな野球部を羨ましがったりもしていました。また神奈川県民としてTVK テレビから流れる県内ニュースや地域情報は、キー局より遥かにディープで充実しているものであり、『おしゃべりトマト』を視聴して中華街や元町に家族で足を運ぶこともありました。

私にとっても、当時の野球部の友人にとっても、TVKテレビは何かのきっかけになってくれていました。そしてそれが私のt v kへの志望動機の一つでもあり、結果入社につながることにもなりました。

年始の挨拶でも申し上げた通り、開局50周年の節目にあたり新中期経営計画を策定し、t v kのパーパス（存在意義）を『お役に立つテレビ局』『なくてはならないテレビ局』として改めて位置づけました。まさに学生時代の私にとってTVK テレビは『お役に立つテレビ局』『なくてはならないテレビ局』だったわけです。

話は変わり、テレビ業界ということを考えていくとコロナ禍による外出自粛やソーシャルメディアのコンプライアンス問題などで多少テレビの信頼性が戻ってきているものの、若者をはじめとしたテレビ離れは、さらに進んでいます。ただそれは若者が、コンテンツに接触する方法が変化してきたということだと思っています。つまり私たちの制作するコンテンツがYouTubeをはじめとしたソーシャルメディアを利用すれば、全国、全世界に配信することも容易になっているということでもあり、誤解を恐れずに申し上げれば、今や私たちが制作するコンテンツをテレビのみで見せるという発想をなくした方がよいのではないかと思います。良質なコンテンツは、イベントへのスピンオフはもちろん、グッズ展開

へと広がるのはご承知の通りですが、大切なのはテレビだけではなく、番組もイベントもソーシャルメディアの力をもって、自社のコンテンツを容易に広めることが可能であるということをお私たちが今一度強く認識することです。その意味で私たちは50周年を機にさらに良質なコンテンツを制作し続けなくてはなりません。そして日々変化していくソーシャルメディアの環境に順応し、共存しなくてはなりません。それがt v kの媒体力アップにも繋がっていくのです。

皆さんの頑張りもあってt v kのYouTubeチャンネル登録者数は15万人目前（3月中旬現在）で民放127社のうちでは8位、そしてTwitterフォロワー数は7位という状況で健闘してくれています。ローカル局として『皆様にお役に立つ情報』や『良質なコンテンツ』を作る、そして広く発信する意識を持ち続けられれば、さらなる放送事業の飛躍の可能性につながると思っています。さらに私たちは、先輩たちが残してくれた住宅展示事業の発展拡大によって、t v k ecom parkという大きな財産を所有することができています。2016年に古河電工より2万2000坪の用地取得をしたことは、t v kの収益構造が大きく変わったことからもわかるように大変重要な転換期であったことを忘れてはいけません。これら住宅展示事業をはじめとし、横浜イングリッシュガーデン、コンビニエンスストアそして1FのヨコハマNEWSハーバーはすべて、『まちづくり』という観点からも『お役に立つテレビ局』『なくてはならないテレビ局』の大きな一翼を担う事業です。そして、今後この財産を大きく発展させていくことが私たちの使命であると考えています。その他にも、これら各事業を支えてくれているt v kコミュニケーションズ、そしてケイズアドバンスデータという『t v kにとってなくてはならないグループ会社』の存在もあります。

先輩方や関係各所の皆様に残していただいた、t v kを支えてくれている数々の事業、財産を、50周年を迎えるこの年に一層発展させ、さらにt v kが『お役に立つテレビ局』『なくてはならないテレビ局』を目指す一年にしなくてはなりません。そのためには社内で働いていただいている皆さんの個々の力がさらに重要になってきます。私が常日頃から申し上げている『コミュニケーション力』『提案力』『プロデュース力』を個々に常に磨く努力をしていただき、t v kそしてt v kグループを一層発展させる、そしてこれまでお世話になった皆様に関局50周年のコンセプト『感謝のカタチ』をお示しできる一年にしていきましょう。

開局50周年にあたっては、会社の数年後を担う副部長を中心としたプロジェクトチームメンバーにまとめていただいたコンテンツや取組みの展開が多数予定されています。この皆さんの取組みが、『お役に立つテレビ局』『なくてはならないテレビ局』への大きな前進になることはもちろんのこと、次の50年のスタートラインに立ったt v kにとって何かのきっかけが生まれることを大きく期待して、開局50周年を迎えるにあたってのご挨拶とさせていただきます。

お世話になった皆様へ『感謝のカタチ』をしっかりとお伝えできる素晴らしい50周年イヤーになるよう、t v kグループ全社で頑張りましょう。